

華やかな死刑派

今 東光



華やかな死刑派

新潮社



華^{はな}やかな死刑^{しけいは}派 六五〇円	昭和四十七年十一月五日 印刷 昭和四十七年十一月十日 発行	著者 今^{こん}東^{とう}光^{こう}	発行者 佐藤 亮 一	発行所 株式^{株式}会社^{会社} 新 潮 社 東京都新宿区矢来町七一 電話東京(〇三)二六〇二二 〒一六二 振替東京八〇八	印刷所 製本所 株式会社金羊社 株式会社大進堂
---	--	--	-----------------------	--	--

乱丁、落丁本はお取替え致します。

目次

華やかな死刑派…………… 五

花盛りプランタン…………… 七

銀杏返しの女…………… 三

天才歌人…………… 一五

雲の中を歩く男…………… 一七

華やかな死刑派

装
幀

難
波
淳
郎

華やかな死刑派

「要慎ようじんした方が好いぜ」

と僕の顔を見るなり、仲間の宮坂普九さんが声を潜めて囁いた。

「宮嶋資夫みやじまがお前まへはんを殺すんだって、短刀どすを持って南天堂で頑張ってるそうだよ」

「へえ。宮嶋資夫がかい。何故だい」

「そりゃわからねえ。だけど、彼所あそこの二階に集まる奴等はお前まへはんを目の仇かたきにしてるんじゃないかねえ」

「さあね。それほど憎まれる訳はねえがな」

事実、僕には心当りがなかった。

宮嶋資夫というプロレタリア作家は、炭坑夫上りというのを鼻にかけ、自慢の腕力で可成り暴行を働いて文壇では鼻つまみだという噂うわさは聞いていた。殊に酒が入ったが最後、一種の酒乱の状態で、誰彼の見さかいなしに殴なぐりかかるそうで、揚句の果てには短刀を振り廻すという甚はなはだ物騒な人間像が、まことしやかに僕らの耳にも入っていたので、あるいは本当に何か僕のことを含むことがあって、殺意を抱いているのかもしれないと思った。

「おい。南天堂行ってみようじゃねえか」

「えっ。行くかい」

「行かなくちや真相は掴めねえぜ」

普九さんというのも、本郷では「河童の普九」という二つ名で通っている喧嘩の好きな仲間。それも優にやさしい文学青年ときているので、気が合った兄弟分で僕が出かけるというと、彼は机の曳出から一振の短刀を懐ろにして仕度をした。

「そっちは」

「大丈夫」

と僕は懐ろを押えて見せた。普九さんは、てっきり僕も短刀を呑んでいると見て安心したらしい。

僕は毎日のように、普九さんの本郷真砂町まきごの家に寝泊りしていた。僕らの仲間では、彼が一番豊かな慶応の文科大学の怠け学生だった。殆ど三田の塾へ行ったことなく休講を続けていたが、「愚劣な文学の講義なんて聴いちゃいられねえよ」と嘯うそぶいていた。

この文学青年は、永井荷風の講義が聴きたくてわざわざ官立の高等学校を止め、私立の慶応義塾きやうおうを択んだに拘らず、彼が入った時には永井荷風の姿はなかったのだ。爾来、彼は大学に興味を喪うしなって仕舞った。

信州の下諏訪しもすわの物持ちの呉服屋の三男に生れた彼は、帝大工科に入っていた次兄と共に、真砂町に二階建の一軒家を借り、婆や雇って甚だ優雅な学生生活を送っていた。と言えは聞えは好いが、兄の方は真面目な大学生だったので、着物になれば久留米紵ぐりつじの対という姿なのに、普九さ

るときには藍微塵^{あいみじん}の結城紬^{ゆうきつな}に博多の一本独鈷^{どっこ}の角帯、それに唐棧^{とうさん}の絆纏^{はんてん}という伝法な格好なので、先ずこれが学生と見る者はなかった。そのくせ、髪^{かみ}の毛はフジタ嗣治^{つぐし}のようにお河童^{かどう}にしているので、さてこそ河童の普九^{ふく}という異名で呼ばれ、本郷辺のカフェーでは誰知らぬ者のない学生ゴロだった。この学生ゴロを一見すると、箸^{はし}にも棒^{ぼう}にもかからない親不孝者^{おんぶくそう}と思われるが、その批判精神はびつくりするほど厳しく、そのために、自分の創作にも抵抗を感じる結果となつて、容易に筆が執れなかった。彼の説によると、文学を創造するといふことは、どうしても書かずにはいられないという、頗^{すこぶ}る高揚された精神活動から発足する内心の欲求がもたらせるもので、従つて今日の日本文学ごときは、多弁な権力者に媚^こびた文章で、吾々^{われわれ}にとつては退屈と無関心以外の何ものでもないと言ふのだ。斯ういう反骨精神が、彼を何ものにも屈することなく、右翼にも左翼にも挑戦していった。彼は跡取りの長兄から仕送りを受けながら、その兄が、小川平吉という政友会のボスの庇護^{ひご}を受けて県會議員になつてゐることも、我慢がならなかったのだ。

僕は自分の家に居るよりも、普九さんの家に居候をきめこんでゐる方が多かつた。次兄は二階座敷に主人公然と納まつていたが、階下を自分の部屋としていた普九さんのところには、僕ばかりでなく、玄関にまで食客が泊つてゐる日もあつて、まったく乱雑をきわめた生活だった。あく朝の食卓で昨夜、枕を並べていた奴が、実はまったく見知らぬチンピラだったりすることもあつて、婆や^{おや}は台所脇^{わき}の女中部屋に引込んだきりで、碌^碌に普九さんの部屋だけは掃除もしなかつた。というより出来なかつたのかもしれない。普九さんは、「アンドレ・ブルトン^{ブルトン}は言つてゐるじゃねえか。『自由だけが未だに私の心を昂^{たか}らせる唯一のものだ』。まったく世界から次第に自由は失われつつあるんだ。わが日本帝国にや自由の片鱗^{かけら}もねえ。有難いことに吾が家にだけあるきりだ。

だから自由に考え自由に振舞って好いよ」

というのが彼の口癖だ。

これは厚かましい居候共にとつては有難い御託宣だ。勝手に来て泊って食ってお礼を述べずに帰っていける家は、まったく東京中を探してもこの家しかなかっただろう。だから何時も銭無し野郎がごろごろしていた。

普九さんと僕は本郷三丁目からぶらぶらと夕まぐれの街を歩きながら、やがて白山上、つまり肴町の四つ辻へ出た。

「南天堂って、あれだぜ」

そこは正確に言うとは横町と称したが、その当時さえ誰もそんな町名を知ってる者はなかった。白山上というざっくりばらんな呼び名で通っていた。だから本郷大学通りからでも、反対に駒込町あたりからでも、団子坂を上って肴町に出ても、巢鴨の方から来ても、春日町の方から来ても、誰も彼も白山上と承知していたのだ。果して南天堂の隣路地に塩湯という銭湯があったが、風呂屋では「まき町湯」という看板を出していた。しかしながら、誰も本当の名を呼ぶものではなく、塩ノ湯で片づけていたのだ。

その塩湯に行く路地側に、南天堂の二階に上る階段があった。一階は書店で、いつも沢山の若い者が本を漁っていた。二階がレストラン兼喫茶で「レバノン」という店だった。三階は南天堂の一家族の住いになっている。実際は南天堂の隣の薬屋でコーヒーをのませたが、此の家のコーヒーは本郷三丁目の青木堂に負けないくらい旨かった。従って真面目な人はいしいコーヒーを飲み薬屋の方に行ったが、腹に一物ある奴はわざわざ「レバノン」に行くのだ。

普九さんと僕とが窓際に陣取ったのは、背水の陣を敷いたようなもので、二階へ上ってくる奴が宮嶋資夫だったら問答無用、たちまち襲撃するつもりだった。コーヒーを睨りながら待っていると、何人か物騒な面構えのアナキストらしい奴が入ってきて、それぞれ席を取って何やら大声で話し合っている。喧嘩があつたら敵味方の容赦なく一暴れするつもりなのだ。あわよくいけば勘定踏み倒せるからだ。

そこへ大島緋か何かの筒袖の着物をきた男が細君らしい女と、他に二三人の髪の毛をのびした奴等五六人が入ってきた。

「おい。大杉栄だぜ」

と普九さんが囁いた。

「あれがそうかい。あの女は」

「辻潤の女房だった伊藤野枝よ」

「へえ。あれが野枝か。大杉がはじめて野枝とランデヴーした時、日比谷公園だったんだってな。ところが二人で手をとって歩いてるうちに催してきたんで、あの公園のド真中でやっちゃったんだとよ」

「どうやって」

「きまつてるじゃねえか。抱っこし合つてよ」

「誰にも見られずにかい」

「妙なもんでな。広い公園のド真中って案外、人目につかねえもんだとよ。大杉が誰かに喋ったのを俺聞いたんだ。本当か嘘か知らねえが」

「おもしろえな」

濃い黒い髪をオールバックにした大杉は、四人にむかつて話をしながら、時折ジロリと店内を見廻していた。

僕等は二時間以上も、僕を殺すという男を待ったが現われなかったので、

「今日は駄目だ。帰ろうか」

と立ち上った。

僕は大杉栄の席の横を通りながら、

「普九さん。宮嶋資夫って運の好い奴だな。今日はこれでドテッ腹に風穴をあけてやるつもりだったが……」

と言って、懷ろから三十二口径のコルト拳銃けんじゅうを出して掌てのひらの上にのせ、くるりと反転させながら

二階を降りた。店内は一瞬、森閑として仕舞った。

「宮嶋に伝えておこう」

たしか大杉栄はそう言ったように聴えたが、僕はそれに返辞する興味もなかったので二人は外へ出た。

「えれえ飛び道具持ってたんだな」

と普九さんは感心して、僕の手からピストルを受け取ると、

「こりゃ小さくて便利だ。どうして手に入れたの」

と聞くのである。

この拳銃は、旧藩主津輕照子未亡人という御方は九州の小笠原長幹伯爵ながよしの令嬢で、津輕英磨伯ひでまろ

爵にお興入れこしになつたのだが、その御舎弟の小笠原長なつひろ王子爵の御所有の物を拝借におよんだのだ。この子爵さんは、鉄砲打ちが道楽で、何回か一緒に鉄砲打ちに行き、雉きや山鳥の代りに、田舎娘などを誘惑して何の鉄砲打ちだかわからない貴族狩人だった。この若殿が護身用に持っていたのを、半ば脅迫して借りだし不時に備えていたので、たとえ宮嶋資夫が短刀ぐらいで僕を刺すとか殺すと言つても、此方こちらには飛び道具があるのでビクともしなかつたのだ。

「ピストルなんて滅多にあたるもんじゃねえや。試射してそう思ったよ。だけど此奴こいつを突きつけるとききよっとするしさ。まして打ぶつ放はなしたら音だけでしゅんとなる。まあ、それだけだよ」

その後も南天堂に行つたが、僕は遂に宮嶋資夫に出会う機会がなかつた。

僕が大杉栄という、当時、日本有数のアナーキストに会つたのは、あれが最初で且つ最後になつて仕舞つた。南天堂には屢々出かけたが、どういふ訳か大杉栄とは逢あわなかつた。その翌年、関東大震災があつて、大杉栄や伊藤野枝等一族は、憲兵隊の甘粕某あまがという士官の手によつて殺害されて仕舞つたので、南天堂で威風堂々たる大杉栄を見た印象は仲々に忘れ難いのである。

宮嶋資夫も南天堂で会えなかつたばかりでなく、遂に彼が死ぬまで僕とは因縁がなかつたようだ。というのは彼と僕とは同年に奇しくも出家し、彼は臨済宗天龍寺派の雲水となり、僕は三十三歳で天台宗延暦寺派の沙門しゃもんとなつた。僕が僧侶そうりよとなつて三年目、比叡山麓坂本の戒蔵院という僧房に籠こもっている或る日、珍しい客が訪ねてきた。来客ということで応接室に行つてみると、

「やあ。お久し振り」

と握手する顔をよく見ると、これが大泉黒石コクセキというロシア人の混血作家だった。戒蔵院の座敷からは坐したまま琵琶湖が見え、遙はるかかに三上山おみつみ（近江富士）の姿が望見される。

「好いところね」

とコクセキーは感嘆したが、僕が、

「その顔どうしたの。酔っぱらって怪我でもしたんじゃない」

と言うと脹れあがった頬やら額を撫で、

「僕はね。何年振りかで古都へ取材旅行に來たついでに、旧友の宮嶋資夫が嵯峨の天龍寺で修行してゐるってから、訪ねてやったらどんなに喜ぶかと思つたので行つたのさ。すると彼はとても悦んでね、僕の面を見るなり『コクセキーよ、先ず酒を吞まして呉れ。俺の胃の腑はまるで日照り続きだ』という始末。そこで二人で新京極へ行つたのよ」

「三島亭とか何とかいう肉屋かい」

「そう。そう。ともかくすぎ焼で飲みはじめた。一升以上は飲んだらうか。ふらふらに酩酊してゐるんで、僕は危ないと思つたから天龍寺まで送つたのさ。すると山門の辺りで俺にからみはじめた。まあ、好い加減にあしらっていると、貴様はヤスナヤ・ポーリヤナで、トルストイ翁に会つたなんて出鱈目をぬかす奴だから、『中央公論』の滝田樗蔭なんて薄馬鹿野郎は騙されるだろうが、俺は貴様の文学など認めていねえんだ。大体、才能もねえくせに文学などやるとは片腹痛い。その性根を俺が叩き直してやるってね。僕を殴る蹴る始末。お仕舞いに天龍寺の大溝へ突き落してから、ふらふらと去って行つたよ。僕はその後ろ姿を見て、宮嶋資夫って奴は坊主になつても、まだ救われないと思うとぼろぼろ涙が流れてね」

と語りながら大泉黒石は泪ぐむのである。

「しかしね。君には会いたいわって言うんだ。同じ仏門に入つた同行だから頻りに会いたいわって